

## 編集後記

### <編集顧問>

鈴木 秋悦  
武田 佳彦  
青野 敏博

### <編集委員>

岡井 崇  
神崎 秀陽  
倉智 博久

「臨婦産」の読者の皆さん、新年おめでとうございます。

さて、小生、昨年の11月に日本医学雑誌編集者会議セミナーに出席し、New England Journal of Medicine (NEJM) のeditorの講演を聞いて参りました。NEJMは初刊の発行が1812年ですから、200年になろうとする歴史のある雑誌です。ご存知のように、最近のimpact factorは50点を超え、ScienceやLancetなどを大幅に引き離してトップを独走中です。2009年の投稿論文は14,725編と、驚異的な数に及んでいます。最も多く掲載されたのが短編の“letter”828編で、採択率も18.9%と比較的高いのですが、original researchのfull paperの採択率は何と4.8%で、掲載は231編とのことでした。

NEJMは現在電子版と冊子版の両媒体で刊行されています。雑誌の質を高く保つために編集者らが努めていることは良い論文を公平に掲載することだそうですが、名前だけで自然に最高級の論文が多数投稿されてくるのですから、他誌の編集者からは嘆息が漏れるばかりでした。次に心掛けているのが投稿から出版までの期間の短縮で、そのために統計学者なども含めてreviewerを大勢抱え、筆者らとのコミュニケーションを良くし、投稿手順を簡素にするなどして査読過程の迅速化を図っていると言っていました。また、読者の年齢層や役職などの地位、さらに彼らの好みや希望などを定期的に調査するとともに、最近ではCOIの開示や不適切投稿論文のチェックなどにも力を入れているとのことでした。わが「臨婦産」とは質の異なる医学雑誌ですが、“医学的・臨床的に有益で価値のある論文を探す努力をする”点だけは、見習って損はないと考えています。

今年もどうぞよろしくお願い致します。

(岡井 崇)